

On(Dis-)placement (配置・転位について)

著者	中村 良夫
号	198
発行年	2000
URL	http://hdl.handle.net/10097/12888

氏 名 (本籍)	なかむらよしお (島根県)
学位の種類	博 士 (情報科学)
学 位 記 番 号	情 博 第 198 号
学位授与年月日	平成 13 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科、専攻	東北大学大学院情報科学研究科 (博士課程) 人間情報科学専攻
学位論文題目	On (Dis-) placement (配置・転位について)
論文審査委員	(主査) 東北大学教授 福地 肇 東北大学教授 関本英太郎 東北大学助教授 菊地 朗
	東北大学教授 岩崎祥一 東北大学助教授 浅川照夫

論文内容要旨

第 1 章 大要

生成文法理論は、その誕生以来、普遍文法すなわち人間が生得的に持つ言語能力の解明を目標としてきた。その理論研究において、発話される文中の要素が本来解釈を受ける位置とは異なる場所に生じる転位現象 (displacement phenomena) は、人間言語を特徴づける特質として生成文法理論の主要な研究対象とされてきた。本研究は、現在の生成文法理論研究の理論体系に基づき、英語ならびに日本語に見られる転移現象ならびに要素の配置 (placement) に関わる事実新たな説明を試み、さらに普遍文法を構成する条件等に関する新しい提案を行うことで理論研究に貢献しようとするものである。

第 1 章では、理論背景と、本研究を構成する第 2 章から第 6 章までの主要な提案について概観する。転位・配置に関わる特性に対して、現在の生成文法理論におけるミニマリスト・プログラムの視点から、次の 2 点が根元的な問いとみなされている。

〔1〕 転位・配置を引き起こすメカニズムはどのようなものであるのか？

〔2〕 なぜ転位・配置が存在するのか？

問い〔1〕に関しては、移動操作によって連鎖が形成され、転位された要素の解釈に関わる情報を担うと考えられている。また、要素の移動に際しては、c 統御という構造的条件が課されていると考えられてきた。しかしながら、c 統御条件が独立した条件として存在すると考えることには従来から疑問が投げかけられてきている。問い〔2〕に関しては、人間の言語システムに存在する非解釈素性が転位を引き起こすと考えられている。この非解釈素性のうち、転位操作を引き起こす直接的な引き金となっていると考えられている EPP (拡大投射原理) 素性については、最近の研究の中で、その実在性を否定する可能性が指摘されている。第 2 章から第 6 章では、これらの積み残されている問題点について次のような提案・分析を提示する。

第2章では、この EPP（拡大投射原理）素性について、その存在を支持する議論を提示する。第3章では、EPP 素性が空所化構文の派生にも関するとの分析を提案する。第4章では、転位現象に関わる c 統御条件に対する代案として、併合操作に課される条件を提案する。第5章では、副詞などの配置に関わる現象に関する分析を提案する。第6章では、従来 c 統御の概念に基づき定式化された諸条件を用いて分析されてきた様々な現象に関して、c 統御の概念に依存しない新しい分析を提案する。

第2章 EPP 支持の論拠

EPP の存在を支持する議論の前提として、第2章では、主語句からの要素の抜き出しを禁じる主語条件が、表層の主語位置に転位された主語句からの抜き出しを禁じる条件として一般化されることを明らかにする。この主語条件の分析に基づき、空演算子構文に見られる主語・目的語の非対象性に関わる事実を検討する。空演算子構文に見られる主語・目的語の非対象性には、これまで様々な分析が提案されたが、ミニマリスト・プログラムの枠組みにおいては、現在のところ素性移動を前提とする分析がなされているのみである。また、素性移動仮説については、否定的な見方が最近の研究の主流となっている。本章では、上述した主語条件の分析に基づき、素性移動仮説を採る場合と採らない場合の分析を提案する。

素性移動仮説を採る場合、格素性等も素性移動による照合が可能となる。したがって、非文法的な例が、先行研究で指摘されているように、主語条件の効果によるものであるならば、空演算子が EPP の要請に従って表層の主語位置に移動していると考えerことで説明が可能になる。一方、素性移動仮説を採らない場合、EPP を、音形を持つ要素の TP 指定部への併合を要請する原理と考えることで問題の非対象性が説明できる。したがって、いずれの場合でも EPP の存在を仮定することによって(1)の説明が可能になり、EPP の存在が支持される。

本章の分析は、EPP が適用されない節構造を持つ小節に関して一定の予測を与える。(1b)の非文法性が EPP 適用の結果であるならば、小節の主語として空演算子が存在するときには文法性は高くなると予測するが、これは、既に知られている事実と合致することを見る。また、小節からの抜き出しに関わる事実についても、本章の分析が事実と合致することが明らかにされる。

第3章 空所化における移動

最近の研究では、転位操作を引き起こす EPP 素性は、随意的な移動現象の派生にも関与していると考えられている。本章では、EPP 素性が存在するとの立場から、EPP 素性が随意的移動を引き起こしている例として、空所化構文の派生を取り上げる。空所化現象の生起については、空所化によって残される要素が何らかの移動操作の適用を受けていると考えられ、様々な提案がなされている。本章ではまず、最近有力な説として提案されている右方移動分析について反論する。

空所化構文の右方移動分析では、空所化を受ける節の一部の要素が右方移動していると主張され、その分析を支持する証拠として、空所化構文が右方移動構文と類似した様々な特性を示すという事実が指摘されている。本章では、これらの事実をより詳細に検討すると、空所化構文は右方移動構文とは異なる性質を持つことを明らかにする。さらに、空所化を受ける節の要素は TP 指定部へ移動されていると考え、その移動は、主要部 T に付与された EPP 素性によって駆動されると分析する。この分

析が正しければ、随意的移動も EPP 素性の存在が引き起こすとの仮説、さらには EPP 素性が存在するという仮説を支持する新たな論拠となる。

第4章 併合に課される条件

転移は要素が基底生成位置から表層位置に移動されることによって生じる現象である。その際、移動操作には c 統御条件が課せられる。一方、日本語のかき混ぜ現象に関して、解釈を受ける位置から動かされているように見える要素は、移動操作を受けたのではなく、表層位置に直接生成されているという分析が最近の研究の中で提案されている。この分析が正しければ、かき混ぜ操作を受けたと考えられてきた要素が、移動された要素と同様に、c 統御条件に従っているかのような振る舞いを見せることには何らかの説明が必要になる。本章では、要素 α は、統語的構成物 K が α を選択する要素であるか、または α を選択する要素を内包しているときに限り K と併合されるという併合操作に課される一般的な条件を提案する。

この条件を仮定することにより、かき混ぜ現象のみならず、移動操作も併合操作を含むことから、一般的に c 統御条件の効果が導き出され、c 統御条件を独立した条件として仮定する必要はなくなる。さらに、本章では、従来 c 統御の概念に基づく最短連結条件などによって説明されてきた、かき混ぜ操作に関わる現象や、ドイツ語で見られるかき混ぜと話題化の違いに関する事実を併合に課される条件に基づき説明する。

第5章 副詞の配置について

本章では、副詞や付加詞句等が文の中で場所を変えて生じる配置の事例について考察する。動詞(句)を修飾する付加詞の場合、一語の副詞は文末あるいは動詞の直前の位置いずれにも生起できるが、複数の語からなる副詞的要素の場合は文末にしか生じない。この事実については、動詞句には一般に要素が付加することは禁じられ、動詞の直前に生じている一語の副詞は、動詞に主要部付加していると分析する。また、動詞の左側で副詞・前置詞句等が語順を代えている例については、移動操作は関与しておらず、場所を移している要素は、かき混ぜ現象の場合と同様に、表層の位置に直接生成されているという分析を与える。

第6章 移動に課される c 統御条件の廃止

本章では、移動に課される「最短条件」を検討する。最近のミニマリスト・プログラムの枠組みでは、それまで移動操作の定義の一部として考えられていた「最短条件」は「介在効果」制約として捉え直され、相対的最小性の現象に説明をあたえている。しかしながら、介在効果の分析も依然として c 統御の概念に基づいている。本章では、相対的最小性の効果を示す事例の派生は、介在効果が生じる前に破綻するとの分析を示すことで、c 統御の概念を用いることなく説明することを提案する。また、適正束縛条件など c 統御の概念に基づき定式化される条件によって説明されてきた事例に関して、新しい分析を提案する。

第7章 結論

第7章では、これまでの議論を総括し、本研究の成果として次の点を挙げる。

- ・ 転位を引き起こすとされる EPP 素性の存在を示す新たな証拠が提示される。
- ・ 転位・配置に関わる制限が、基本操作である併合に課される制限から生じることが明らかにされる。
- ・ c 統御の概念がミニマリスト・プログラムの対象とする統語部門において不要なものであるとする方向性が支持されることが示される。

論文審査の結果の要旨

生成文法の統語論研究において、「転位」現象は、「配置」現象とともに、その性質の解明が常に大きな課題となってきた。転位現象は統語移動の結果として捉えられるが、人間のもつ言語能力の計算的側面に対応するものとしての移動操作の解明は 1990 年代に入り、極小主義理論が提唱されて以来、生成文法の中心的な研究課題になっている。本論文は、多様な統語構文に見られる転位現象を詳細に分析することにより、移動操作の概念に対する理論的な考察をしたもので、全編 7 章から成る。

第 1 章は序論であり、研究の背景、および取り扱う現象の理論的問題点を詳述している。

第 2 章では、転位を引き起こす要因としての EPP 素性を取り上げる。これまで、EPP 効果を言語体系の他の条件から導き出し、EPP 素性自体を排除しようとする分析が提唱されているが、本論文では、空演算子移動と主語条件との相互作用に関する事実に基づいて、EPP 素性が必要であるとする議論の構築に成功している。この論考は複雑ではあるが、堅牢で説得力がある。

第 3 章では、空所化現象を取り上げる。近年、空所化には右方向への移動が関与しているように分析する先行研究が多くあるが、本論文では、これを修正・発展させて、移動は左方向であり、さらに EPP 素性によって駆動されると分析することによって、EPP 素性の存在を支持する新しい根拠を提示している。これは興味深い指摘である。

第 4 章では、移動操作の制約としての構成素統御条件を取り上げ、そのもつ構造上の融合操作との関連を論じている。日本語などの自由語順現象を、融合操作に基づいて説明する先行研究を踏まえながら、構成素統御条件の効果は融合に課せられる条件からもたらされるものであり、移動操作自体にこの条件を設ける必要がないことを論じている。

第 5 章では、前章で論じた融合に課せられる条件のもたらす帰結として、英語の副詞句の配置が一定の位置に分布が限られる事実が説明できることを論じている。同じ副詞類でも、語の場合と句の場合で分布が異なる事実が、普遍的な原理から導き出されることを明らかにしたのは重要な知見である。

第 6 章では、再び構成素統御条件を取り上げ、理論的にこの条件を取り除く可能性を追求している。構成素統御の概念に言及する条件の一つである介在条件の効果が、EPP 素性の生起に関する条件から導き出されると主張することによって、この概念を理論的枠組から排除することが可能であると論じている。

第 7 章は結論を述べている。

以上要するに、本論文は、自然言語における転位の性質を表す移動操作は、EPP 素性からの駆動を受けて適用され、句構造の生成に関わる融合操作をも含んだ操作であることを論じたもので、人間の言語認知機構の計算的側面に関して新たな知見をもたらすとともに、情報科学および理論言語学の進展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は博士（情報科学）の学位論文として合格と認める。